

今年の桜は、例年に増して早く満開を迎えそうです。桜と言えば新年度、入学式の象徴でしたが、温暖化のせいなのでしょうが、近年の新年度は葉桜になってしまいます。

令和4年度もこれで終業です。人は常にリフレクティブ＝内省的であるべきです。よく頑張っている、逃げようとしている、懸命に努力している、怒りに我を忘れて人を責め立てている、等々、絶えず自己を頭上1メートルからモニターしていること。メタ認知ともいいます。3年生は先週卒業しました。来し方を振り返り、行く末を展望する季節です。よくよく自己を内省しましょう。

以下の引用から、諸君と一緒に考えてみたいと思います。

新聞社と放送局で仕事をしてちょうど四半世紀、さまざまな事件を見てきたが、2016年7月26日未明、神奈川県相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で起きた殺傷事件から受けた衝撃は、これまでにないものだった。

4月から東京で単身赴任中の私は、その日の朝事件発生を知って、港区赤坂のTBSに駆け付けた。2階の報道局は、すでに多くの人が走り回り、声か飛び交っていた。

容疑者は園の元職員で、深夜の施設に侵入し、重度の障害のある入所者を順番に刺殺していったという。喧噪のなかに、おぞましい事件のにおいが漂っていた。

TBSは午前10時の番組を差し替えて、1時間の報道特別番組を放送した。

「次、現場の中継行くよ！はい、しゃべって！」社会部の内野記者が中継に立った。内野記者は、現場近くの民家に設置された防犯カメラ映像の入手に成功していた。

午前1時37分、画面の右奥から容疑者の車が走ってくる。通り過ぎるかという所で車は停まった。運転席から降りた容疑者は、トランクから刃物のようなものを取り出して、今来た方向に歩いて行った。その先には、かつての勤め先、「やまゆり園」があった。そして午前2時50分、容疑者は戻って車に乗り走り去った。この1時間あまりの間に、やまゆり園は惨劇が繰り広げられていたのである。

この映像には、犯罪の始まりと終わりが記録されていた。紛れもないスクープだった。私は「初動も早かったしテレビらしい映像スクープもあった。みんなそれぞれ記者の基本動作がしっかりしていて、素晴らしい特番でした」と報道局長に声をかけた。

中間のスクープを喜ぶ一方で、私は内心、かなり不安定になっていた。

逮捕された元職員、植松聖容疑者は、「障害者は生きていく必要がない」と供述している、と伝えられていたからだ。送検される容疑者は今どきの青年だったが、カメラに向かって笑顔さえ見せていた。多くの報道陣に囲まれていることに、喜びと満足を感じているようにも見えた。

私たち夫婦が受かった長男は、脳の機能障害「自閉症」が生まれながらあって、コミュニケーションに問題がある。福岡市にある特別支援学校の高等部に通う17歳だ。

遠く離れた長男、そして一緒に暮らす妻と次男の顔を思い浮かべた。この男の刃は、私たち家族にも向けられている――。

テレビで容疑者の顔を見るたびに、心のなかをやすりで削られているような気分に苛まれながら、二晩が過ぎた。取材先と会食し、一人暮らしの1Kに帰ったのは、すでに日付を大きく超えていた。私はパソコンを開いた。怒りや憤りをぶちまけても、容疑者はおそらく笑うだけだ。違う次元の言葉を綴りたかった。

神戸金史 『障害を持つ息子へ』 ブックマン社2016

文中の植松容疑者は刑が確定し、現在は植松死刑囚です。この事件は世界中で報道され、アメリカ合衆国の当時のケリー国務長官やロシアのプーチン大統領も含め各国首脳が弔意を示しました。著者はパソコンを開いて、詩を綴ります。

障害を持つ息子へ

私は、思うのです。	ああ、またこんな夢を見てしまった。
長男が、もし障害を持っていなければ、	ああ、ごめんね。
あなたはもっと、普通の生活を送っていたかもしれないと。	
私は考えてしまうのです。	幼い次男は、「お兄ちゃんはやべれないんだよ」と言います。
長男が、もし障害を持っていなければ、	いずれ「お前のお兄ちゃんは馬鹿だ」と言われ、泣くんだろう。
私たちはもっと楽に暮らしていけたかもしれないと。	想像すると、私は朝食がのどを通らなくなります。
	そんな朝を何度も過ごして、突然気が付いたのです。
何度も夢を見ました。	弟よ、お前は人にいじめられるかもしれないが、
「お父さん、朝だよ、起きてよ」	人をいじめる人にはならないだろう。
長男が私を揺り起こしに来るのです。	生まれたときから、障害のある兄ちゃんがいいた。
	お前の人格は、この兄ちゃんがいいた環境で形作られたのだ。
「ほら、障害なんてなかったろ。心配しすぎなんだよ」	お前はやさしい、いい男に育つだろう。
夢の中で、私は妻に話しかけます。	
	それから、私はハタと気づいたのです。
そして目が覚めると、いつもの通りの朝なのです。	
言葉のしゃべれない長男が、騒いでいます。	あなたが生まれたことで、
何と言っているのか、私にはわかりません。	私たち夫婦は悩み考え、それまでとは違う人生を生きてきた。
	親である私たちでさえ、あなたが生まれなかったら、今の私たち
	ではないのだね。

神戸金史 『障害を持つ息子へ』 ブックマン社2016

私はこの翌年、特別支援学校に着任しましたが、この事件の話題は保護者間でも教職員間でも避けられていたのを鮮明に憶えています。

この詩は、当時新聞やテレビで紹介され、話題になりました。共感の声が殺到しました。しかしその一方で、たとえば「障害者の親は権利ばかり主張する」「生まれた瞬間から社会に負担をかけ続けているあなたの子供のような人」など、心ない言葉も噴出したのです。このような物言いが当事者の心をやすりで削ることになるなんて、容易に想像できるのに、それでも発言しなければ気の済まない人がいます。今回諸君と考えるのは、このことです。

1970年に森永ヒ素ミルク事件がありました。粉ミルクに誤ってヒ素が混入し、そのため多くの子供たちが障害を負った事件です。裁判の弁護団長を務めた中坊公平の本から引用します。

——ある被害者の子供は、生涯に3つの言葉しかしゃべれなかった。オカア、マンマ、アホウの3つである。オカア、マンマは、母親が教えた。その言葉が言えないと困るだろうと考えてのことだ。では、3つ目のアホウとは誰が教えたのか。

その子は、外に行くのが好きだったという。だが、行っても知能が遅れているから、よその子供のからかいの対象になる。水をかけられたり、砂をかけられたりした。そこで覚えたのがアホウという言葉だった。何度も何度もからかわれているうちに、覚えてしまったのである。

それでも、その子は、外では決して泣かなかったという。いじめられても、何もなかったかのように笑っている。が、家に帰ってくると、母親の手にすがって泣く。決して、からかわれている辛さがわからないのではない。十分わかっているのだ。

その子の母親は、中坊に対して、そういうことを教えこんだ世間が、実は私は一番憎い、ということを書いた。

NHK住専プロジェクト編 『野戦の指揮官・中坊公平』 NHKブックス1997



森永の名誉のために付け加えますが、この裁判ののち森永は、被害者救済のために心血を注ぎます。そして被害者は、森永の社長に対して感謝状をわたすのです。悲しい事件とは言え、加害、被害の立場を超え、恩讐の彼方に心を通わすさまは、美しいです。

最後にもうひとつ、詩を引用させていただきます。障害のある子を持つ母親が、とある講演会でこの詩に出会い、励まされました。それから20年経ち、詩を紹介してくれた方に再会します。母親は、「何とか頑張れたのは、本当に先生のおかげなんです。何回挫折したかわかりません」と、涙を拭きながら礼を述べました。誰かの生きる支えになれるって、本当に素晴らしいことだと思います。

皆さんの中にも、近い将来親になる人が多くいると思います。妊娠がわかった時、産科医から出生前診断を紹介されます。知っていますか。胎児に特定の障害があるかを検査することです。その結果、胎児の障害がわかって、人工妊娠中絶を決断する人もいます。重い決断です。気安く受ける検査ではないのです。その決断を、一生涯悩む人も多く聞きます。ぜひ身近に引き寄せて、詩を受け止めてください。



会議が開かれました。
地球からはるか遠くで。
「また次の赤ちゃん誕生の時間ですよ」
天においてになる神様に向かって天使たちは言いました。

「この子は特別の赤ちゃんで、たくさんの愛情が必要でしょう。
この子の成長はとてもゆっくりに見えるかもしれません。
もしかして一人前になれないかもしれません。」

だからこの子は下界で会う人々に
とくに気をつけてもらわなければならないのです。

もしかしてこの子の思うことは
なかなかわかってもらえないかもしれません。
なにをやってもうまくいかないかもしれません。

ですから私たちはこの子がどこに生まれるか
注意深く選ばなければならないのです。

この子の生涯が幸せなものとなるように
どうぞ神様この子のためにすばらしい両親を探してあげてください。
神様のために特別な任務を引き受けてくれるような両親を。

その二人はすぐには気が付かないかもしれませんが。
彼ら二人が自分たちに求められている特別な役割を。

けれども天から授けられたこの子によって
ますます強い信仰と豊かな愛を抱くようになることでしょう。

やがて二人は自分たちに与えられた特別の神の思し召しを悟る
ようになるでしょう。

天からおくられたこの子を育てることによって。
柔和で穏やかなこの尊い授かりものこそ
天から授かった特別な子供なのです」

神戸金史 『障害を持つ息子へ』 ブックマン社2016

春は出会いと別れの季節です。諸君のみずみずしい感性が、歪んでこり固まったりしないように。人の痛みを我が痛みとして受け止め、手を差し伸べ、声をかけ、心を砕くことを、ためらわずできるように。伊奈学園に集う諸君がみな、世を照らす光であるよう願います。